

暗黒の青春

大野城市 松永 言恵

昭和6年9月18日私は小学校5年生だった。

満州事変に始まり日華事変と進み、世の中は軍国主義一色に塗りかえられて行った。

人々は昼も夜も旗行列だ、提灯行列だ、とまるでお祭り騒ぎで、あれよあれよと軍国列車はそのレールを延ばし、ついに真珠湾攻撃に端を発し、昭和16年12月8日アメリカ合衆国を相手に太平洋戦争が勃発した。

このラジオニュースを知ったとき、体中が震える想いであった。街中は一変したような異様な雰囲気、底知れぬ不気味さを感じた。

アメリカとの戦争は、絶対避けてほしかった。

私の卒業したミッションスクールは、アメリカ女性校長を戴き、アメリカ人教師も多く、その人達を敵国人とは思えない。しかし私の心とは裏腹に、一般国民は戦争に浮かれ、虚偽の報道に酔い、神風を信じ勝利を夢み、万歳万歳と多くの出征兵士を見送った。

やがて、命令で天井板をはがし、竹槍で人殺しの演習に生真面目に立ち向かっていた。私は脚気と偽り、人殺しの演習だけは拒否した。

しかし軍国列車は走り続け、私の青春時代は暗黒のトンネルの中へずるずると引き込まれて行った。純粋で前途有望な青年達は、軍国の餌食となり、愛する者達を守らんと潔く若き人生を散って逝った。私の大好きだった母の弟も、幼児2人を残し、フィリピンでわずか終戦2ヶ月前に果てた。その遺骨箱の中味は石ころだった。

現在オウム真理教のテレビニュースを見る時つくづく思う。社会のあり方、人間の弱さ、宗教の名のもとに洗脳されていく若者達。

私は60年昔、正しい宗教の精神のもとに教育を受け、自分の考えで自分の足で横道にそれることもなく人生を歩いて来た。

戦時中の人々の行動は不思議に思う事も多く、何かに洗脳されていたのではあるまいか。

そして昭和20年を迎えた頃より深刻さは増し、大都市の被害ニュースも多くなった。

私は2年前から、長崎駅から5分ほどの所にある林兼系列の軍納缶詰会社の庶務課に勤務していた。常務は軍人で中佐か大佐だった。

7月の終り、最初の空襲があった。立神の三菱造船所をめぐり投下された250kgの爆弾は社宅に直撃、学友草野キミ子さんの両親兄弟妹5名犠牲者となられた。8月2日、駅周辺に250kgの爆弾投下の時、わが事務所のお向いの松尾倉庫に落下した爆弾は不発弾だった。

6日広島の新爆弾のニュースは、空中で炸裂するから被害は甚大で広範囲に及ぶ、それ以上の真相は知らされぬうち8月9日原子爆弾はわが長崎の上空で炸裂した。晴天のへきれきと言おうか、私は空中炸裂弾だと直感した。

神戸大震災の大火災のニュースを見ながら、あの時三日三晩燃え続けた長崎の町が重複し、私の人生から消すことのできない爪跡が、ありありと蘇って来る。

警戒警報解除となり、防空壕よりコンクリートの事務所に戻り、午前11時2分、もうすぐお弁当だと思ったその瞬間、目もくらむ閃光と長崎駅の列車が暴走したかと思いまどう轟音とともに、ボンベイ最後の日を想わせるその威力は、すべてを破壊した。色は消え灰色にけむり、応接間を改造した事務所のシャンデリアが骨だけ残し、ブランコしていた中庭の南国風の樹木は、枯木となり樹液が流れていた。厚いコンクリートの壁が私達を救ってくれた、机の下にもぐった全員10名の社員は無事だった。

西山の課長の家に逃げることになった。

走りながらふと見た駅の方角から、大勢の人の固りが大波の如く押し寄せて来る。早く逃げねばとあせった。ちょうどその時、誰かが私の名を叫んだ。駅に切符を買いに行った部下のHさんが上半身裸で私をつかまえ泣き出した。18才の彼女に肌はスリッパを残し真赤に火ぶくれている。急に怖しくなり、医務係の男性社員に任せて「Hさんごめん」と業務課の節子さんの手をつかんで西山に向って逃げた。

3年前一言詫びを言いたかった彼女に47年ぶりに探して探してやっと逢えた。その時見せてくれた背中は、白い肌に背中一面肩から二の腕にかけケロイドで造られた世界地図を想わせた。黒いナイロンのブラウスがジリジリ燃え出し肌にへばり付いてぬげなかったという。私はこれ程ひどいとは想像だにできなかった。

さてその夜は、崇福寺の中の石段を50段程登りつめた町内の横穴防空壕に落付いた。

夜おそく、城山の三菱社宅に住む叔父が17才の息子と逃れて来た。叔母と3人の幼な子の姿はなかった。終戦までの1週間、戸板1枚に4人足を縮めて横に寝た。水滴のポタリポタリと落ちる中国人墓のすぐ横のこの壕内が、唯一の安全地帯に思えた。

命からがら逃げて来た被災者で石段は一杯だ。大抵火傷で黄色い膿が顔や体中覆い、年も性別も解らぬ程ふくれむくんで正視できない。そのところへ真夏の太陽は情容赦なく照り付け、その人達も無傷の人も次々と死んで行った。

喜んだのも束の間、明日はわが身と処刑を待つ人の心境であったろう。万一を願い、城山へ向かった叔父は、一所に固まっていた妻子4人の骨をハンカチに大切に持ち帰った。爆心地の様子は、筆舌に絶する残酷物語で、爆心地に住む学友4人も即死だった。

終戦は迎えても筑町の疎開地は、たちまち死体焼却場となり、毎日あちこちで縁者が戸板の上に枯れ木を乗せ、自分達の手で茶毘に付すのである。これ等の光景は50年たっても、昨日の事のように私の脳裏に焼き付いている。

8月15日、戦争の悲劇はこの世の地獄を体験させられ、やっと終着駅へたどり着いた。

一体この戦争は何のためだったのだろうか。

今もって私には納得できない。